ベシの多義性の原理について

――現代語ハズダとの対照から――

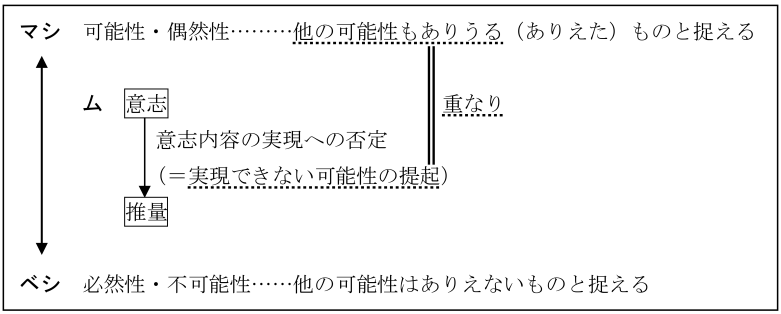
古　川　大　悟

はじめに

本稿は、古代語の助動詞ベシの多義的なあり方について、その原理の説明を提示する。多義性のしくみを問うことは、多義の根幹をなす基本的意味は何かと問うことにも関わる。ベシの基本的意味については稿者のこれまでの研究の蓄積もあり、それも含めてまず本稿の背景と意図を詳述することから始める。

第１節　研究の背景と意図

拙稿（2019・2023a・2023b）で述べた主張を要約すると、古代日本語における助動詞ム・マシ・ベシの関係は図のようになる[1]。



【図１】

【図１】のうち、本稿に深く関わるマシ・ベシに限って概要を述べる。マシは次のような反実仮想の用法を典型とする。

出でて行く道知らませ［末世］ばあらかじめ妹を留めむ関も置かまし［末思］を　（萬葉集３・468　家持の亡妾悲傷歌）

これは､「道を知っているので関を置ける」という可能性（実現せず）と、「道を知らないので関を置けない」という可能性（実現済み）を比較し、前者ではなく後者が現実化したことを嘆く表現である。それは現在の現実世界を、他の可能性もあり得たはずのもの、すなわち偶然的なものと捉えることである。マシには中古から「いかにせまし」のような迷いの用法が生じるが、これも複数の可能性を選択肢として比較検討するという点では、可能性の比較という意味規定によって包摂される（以上、拙稿 2019・2023b）。

ベシは、マシと対をなすような意味を表す。

草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべく［倍久］も咲ける萩かも

（萬葉集８・1532　笠金村が伊香山（いかごやま）で作った歌）

萩の花が美しく咲いており、その花に触れでもしたら色に染まってしまうほどである、染まってしまうことが必然であると主体が認識していることを表す。必然であるとは、それ以外の可能性はあり得ないということであり、不可能性に通じる。「可能性・偶然性」を基本とするマシに対し、ベシの意味の基本は「必然性・不可能性」にある（以上、拙稿 2023b）。

【図１】の整理は、ムに対応する形容詞的な形態としてマシ・ベシが存在するものとも解釈され、バマ相通の現象に照らせば、成立論的な観点からも不自然でないものと思われる。ただしベシの「必然性・不可能性」という規定は、現段階ではマシの意味から推論されたにすぎず、当為や命令などの位置づけも含め、さらなる検証を要する。

助動詞相当の形式を可能性・必然性という把握によって位置づける発想は、現代語研究に見られるものであり、木下りか（2013：193）は次のように整理している。

かもしれない：「可能性」を表す。

にちがいない：「必然性」を表す。

もちろん、これらの形式が古代語のマシ・ベシにぴたりと対応するわけではない。例えば古代語のマシは、当該の可能性を別の可能性と比較する意味を表すが、カモシレナイに比較の意味までは認めがたい。また、ベシと異なり、チガイナイは（その形態自体にナイを含むためか）否定形をとらないという点や、「……べきものを」のような反実仮想の表現を形成しにくいといった違いがある。現古の対照は、このように個別的な事項の比較に終始するのであれば、現象的な事実の羅列にとどまる。しかし対照を通じて、例えば現代語の記述の枠組み自体を古代語に援用して検証するなど、古代語助動詞の意味記述モデルを構想するための示唆が得られるのならば、有意義であろう。本稿では、まずベシに類する現代語の形式を取り上げ、その意味のしくみを説明する枠組みを示す。そのうえで、同じ枠組みによってベシの分析を試みた場合、ベシの多義性についていかなる説明が可能となるかを論じたい。多義性の原理を明確化することは、ベシの基本的な意味を「必然性・不可能性」と定めることが妥当であるかということの検証にもつながる。

ベシに近い現代語の助動詞相当形式としては、統語的な条件も考慮すれば、チガイナイよりもハズダが該当するように思う。「……はずがない」という否定形があり、「……はずだったのに」という反実仮想の表現も形成しうる。富士谷成章『あゆひ抄』（1778 年）は、ベシの里言として「ハズ」を挙げており、

> 「ハズ」と言ふ言葉は、弓の筈の合ふ事より言ひそめたるにや。狭き言葉にて、「ハズ」と言ふ所は皆「可」に当たれども、「可」は「ハズ」に当たらぬ所多し。

と述べる。成章が言うようにベシとハズダには不一致もあり（後述　第２節末）、両形式を対応づけることに異論もありえようが、ここで古代語ベシに最も近い現代語は何かという議論にこだわっても生産的ではない。ベシに類する現代語の形式はハズダであるということを、作業仮説として一旦認めてしまって、そのうえで議論を進めたい。まずは現代語ハズダにつ

いて、その意味の全体像を描く（第２節）。そして、ハズダの意味のしくみとパラレルな形で古代語ベシの諸例を意味づけてみると、ベシの多義性についてどのようなことが考えられるかを論じる（第３節）。

第２節　現代語ハズダの意味のしくみ

２・１　ハズダについての概略

寺村秀夫（1984：266）はハズダの意味について次のように言う。

> ある事柄の真否について判断を求められたとき、あるいは自分で判断を下すべき場面に直面したとき、確言的には言えないが、自分が現在知っている事実（P）から推論すると、当然こう（Q）である、ということを言う

このように先行研究では、ハズダは主に推論（とりわけ必当然的に帰結事態が導かれる演繹的推論）を表すものと規定されてきた。

Ⅰ　今日、彼は夕方には帰ってくるはずだ。

とは、何らかの根拠に基づいて必然的に「今日、彼は夕方には帰ってくる」という内容が導かれることを表す。例えば次のような推論がなされていると考えられる。

彼はサッカーの試合中継があると必ず自宅で観戦する　……大前提
今日は夕方からサッカーの試合中継がある　……小前提
（ゆえに）今日、彼は夕方には帰ってくるはずだ　……帰結・結論

ただし、推論という規定では一見包摂しがたいハズダの用例があることも知られている。

Ⅱ　財布は確かあそこに置いたはずだ。
Ⅲ　君には何度も注意したはずだ（ろう）。なぜまた忘れ物をしたんだ。
Ⅳ　こんなはずではなかったのに……。
Ⅴ　トムは元料理人であるらしい。なるほど料理がうまいはずだ。

Ⅱは記憶の確認である。Ⅲも記憶の確認という面を持ちながら、現在の予想外のあり方に照らして過去を再確認するという意味では、Ⅳにも通じ

る。Ｖは高橋太郎（1975）が「さとり」の用法と呼んだ納得の表現である。こうした例外的な用法の位置づけには様々な議論があり、近年では朴天弘（2021）がハズダ全体に一貫する「『知識確認』という機能」を見出している。ここでは主に「機能」以前の文法的意味という観点から、ハズダの意味のしくみを明らかにし、古代語ベシと比較するための準備としたい。

２・２　用例に基づく検討

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしさうにして居たが、やがて思ひ切つた調子で「あなたが、白井道也と仰しやるんで」と大なる好奇心を以て聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかる筈だ。それを斯様に聞くのは世馴れぬ文学士だからである。

（夏目漱石「野分」『定本漱石全集』より、振仮名・改行を省略）

ここでのハズダは、何よりもまず、

名刺を見れば相手の名前がわかる
中野君は名刺を見ている
（ゆえに）中野君は相手の名前がわかるはずだ　……★

という推論を表す。ここで実験的に、「名刺を見ればわかるはずだ」という表現を維持したまま、次のような作例を考えてみる（便宜上、人物の名を中野君で統一する）。

初めて会った中野君は私の名前を言い当てた。なぜ私の名を知っているのかと驚いていると、中野君は「先ほど取り次ぎの方からお名刺をいただきまして、それを拝見しました」と言った。なるほど名刺を見ればわかるはずだ。

このような「さとり」の用法も、★と同じ推論の構造を基礎としていることが知られる。「さとり」とは、現実事態[(2)]が推論の構造に即して納得しうるものとなり、自己の理解に収まったことの表明なのであり、推論という典型的意味に基づく用法とみなしうる。

Ｖ　トムは元料理人であるらしい。なるほど料理がうまいはずだ。

の場合は、

元料理人は料理がうまい

トムは元料理人である

（ゆえに）トムは料理がうまいはずだ

という推論の構造に即して、現実のトムのありようを整合的に理解しうるということを意味する。古代語ではこのような納得をウベシ（ウベ･ムベ）で表す。ウベシはベシと語源的に関連があるとも説かれるが、確証が得られず、本稿ではこれ以上ふれない。

また、同様に例外的な用例とされていた、

Ⅱ　財布は確かあそこに置いたはずだ。

も、次のような構造であると見れば、推論のヴァリエーションとして位置づけられる。

自分の記憶は正しい（記憶違いや忘却などはない）

自分の記憶では、財布をあそこに置いた覚えがある

（ゆえに）財布はあそこに置いたはずだ

この場合のハズダは、しばしば「確か」「たぶん」などの副詞と共起し、自分の記憶が正しいという大前提のもとでのみ推論が成り立つという留保が明確化されることになる。

漱石の用例に戻ろう。名刺を見れば相手の名前がわかるのであり、中野君は名を問う必要などないにもかかわらず、あえて名を問うという、理屈の上で想定されるあり方とは齟齬する状況が実現されている。ハズダはこのように観念と現実との乖離を表すことがあり[(3)]、特に「……はずなのに」「……はずだったのに」のように逆接が続くと、その乖離が顕著に示される。この乖離が言語主体自身に起因するものであれば、

Ⅳ　こんなはずではなかったのに……

というように、当初の推論内容を再確認しつつ、それに反する現実を不本意に思う表現となる。漱石の例は語り手の立場から中野君について客観的に述べられているため、不本意さを表すものではないが、そのかわりにや

や異なる表現性への契機を有する。

試みに、「聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ」という表現が、中野君への呼び掛けとして述べられる場合を仮定する。理屈上は名刺を見ている以上、名を問う必要などないにもかかわらず、それに反する行動がなされたことを問い質し、非難するような表現となる。この場合、推論内容が現実によって否認された状況に際して、元の推論内容を述べ直しているのであって、

Ⅲ　君には何度も注意したはずだ(ろう)。なぜまた忘れ物をしたんだ。

についても同断である。

何度も注意したらもう忘れ物をしない　……ｘ（大前提）
君には何度も注意した　……ｙ（小前提）
（ゆえに）君はもう忘れ物をしないはずだ　……ｚ（帰結・結論）

という推論が基礎にあり、これに逸脱する現実が生じたので、改めて元の推論内容について言明するのである。――なお、ふつう推論をなす場合には、帰結・結論であるｚの内容について「……はずだ」と述べられるが、現実との齟齬を問題とする場合には、前提にあたるｘやｙにハズダが付されることもあるのだとわかる（Ⅲではｙに付されている）。

このように漱石の用例は、推論内容から逸脱した現実事態について問い質すⅢのような例への近接をもつものと位置づけられる。

２・３　補足的な考察とまとめ

以上で、例外とされるⅡ～Ⅴの用例も含めてハズダの全体像を網羅したが、さらに補足的な考察を加えておきたい。「聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ」という表現は、名を問うた人物への非難として――すなわち名を問うということの否認として――発せられる場合、「名を聞くのではなく、名刺を見て名を知るべきだ」という当為との近さが窺われる。これはさらに「名を聞くな、名刺を見て名を知れ」といった命令へと通じるであろう[(4)]。現代語のハズダはこうした意味領域には侵出していないが、

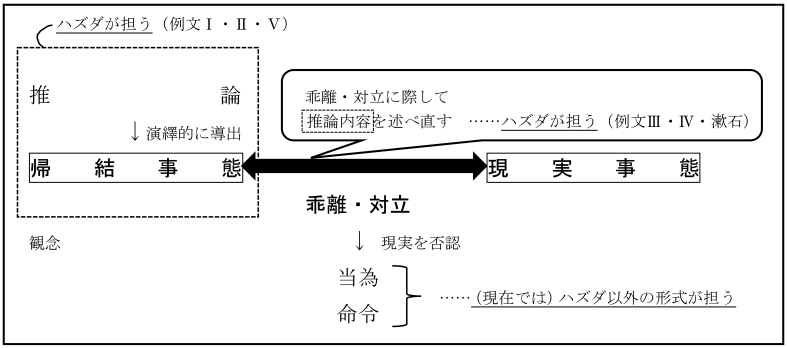
山口堯二（2002：128）が指摘するように、近世前期のハズダは一部、当為を表した。

然し、それもいやならいやにて、我心ひとつにておさめおかるゝ筈なるを、ほれたといふ男にしるしをつけて、旦那の耳に入らるゝ心根、いかにしてもむごし。

（『けいせい色三味線』江戸・五　山口氏の挙例に基づく）

近世以降ベシが当為に特化して残存したことで、ハズダはベシと競合し、当為への侵出がブロックされたと山口氏は述べる。一方で古代語のベシは、次節で見るように、現代語のハズダの意味領域に加え、当為や命令の意味まで広く担っていた。『あゆひ抄』がハズをベシに比べて「狭き言葉」と言ったのは、このような意味である。

本節では、推論という意味を起点にすることで、現代語ハズダの全体像を描けることを示した。概略を模式的に**【図２】**に示しておく。



【図２】

第３節　古代語ベシの意味のしくみ

３・１　論述の前提（対象的意味と作用的意味）

ここまで、ハズダの基本的意味について「推論」という言い方をしてきたが、議論の焦点をベシに移すにあたって、いったん厳密に考えておきた

い。「今夜は雨になるはずだ」という表現は、言語主体が降雨を推定しているという作用的（認識的）意味を表すと同時に、降雨は現時点で未実現ながら、今夜必然的に生じる事態であるという対象的（事態的）意味をも相即的に備える。二種の意味は常に表裏一体である（拙稿 2023b）。第 1 節で挙げた、

草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべく［倍久］も咲ける萩かも

（萬葉集 8・1532）

も、萩という対象の性質であるとともに、萩を見ている主体の推定でもある。これ以降のベシに関する論述では、前節との整合性を考慮し、便宜的に「推論」という作用面からの言い方をすることが多いが、対象的意味の存在を否定するものではないことを断っておく。

以下では、先掲**【図２】**の枠組みに基づいてベシの用例を分類することを試み、それを通じてベシの多義性についてどのようなことがいえるかを論じる。文献時代としては最古のまとまった分量のある資料として、萬葉集（ベシ 181 例）を用いる。散文や訓点資料もあるとよいが、それらは主に平安時代の資料によるほかなく、時代の異なるものを含めると議論が錯綜するので、本稿では萬葉集に限定する。さらなる調査は別稿を期す。

３・２　ベシの用例分類の概略

Ⅰ　今日、彼は夕方には帰ってくるはずだ。

Ⅱ　財布は確かあそこに置いたはずだ。

Ⅴ　トムは元料理人であるらしい。なるほど料理がうまいはずだ。

のようなハズダは、基本的な推論の構造に対応した（**【図２】**破線枠）。これに相当するベシをＡ類とする。結果論をいえば、記憶確認（Ⅱ）や納得（Ⅴ）は萬葉集のベシにはないので、Ⅰのような通常の推論のみがＡ類となり、125 例存する。「白露を取らば消ぬべし」（10・2173）、「色に出でて恋ひば人見て知りぬべし」（11・2566）などである。一方、

Ⅲ　君には何度も注意したはずだ（ろう）。なぜまた忘れ物をしたんだ。

Ⅳ　こんなはずではなかったのに……。

のような例は、観念と現実とのずれに接して、推論内容を述べ直すものであった（**【図２】**吹出）。このように、推論の帰結と現実との乖離・対立を問題にするベシの用例を、Ａ類とは区別してＢ類とする。40 例がそれに属する。その内訳は、反語（21 例）と、ナクニや（モノ）ヲなど否定・逆接的な語と共起する例（17 例）が中心をなしており[5]、現実との乖離・対立の存在を形態的にも顕在化させたものが多いといえる。例えば、雲が無情にも三輪山を隠してしまったことに対して「隠さふべしや」（1・17～18）と言う反語の用例がある。これは後述するように「隠してよいのか」とも理解され、むろん「隠すはずであろうか」というハズダによる訳出では不十分である。分類は、ハズダに置換可能か否かにかかわらず、意味の構造に即して行う。本稿の主旨は、ハズダとベシを単に対応づけることではなく、ハズダの説明に有用と考えられる枠組み自体をベシに援用して検証することである。したがって、Ｂ類には現代語のハズダが表す意味をはみ出すものも含まれる。

萬葉集のベシには以上の他に、一般に丈夫（ますらを）は～すべきだ、ぜひとも～するがよいといった当為・命令の類があり（**【図２】**最下部）、これをＣ類とする。まとめると次の**【表】**のようになる。本稿の眼目はＢ類を設定したことにあり、Ｂ類に入らないもののうち、推論をＡ類、当為の類をＣ類に振り分けたと見ることもできる。

【表】萬葉集のベシ 181 例の分類

Ａ類　（現実との乖離・対立には関わらない）通常の推論を表す例	125 例
Ｂ類　推論から得られる帰結と現実との乖離・対立を問題とする例	40 例
Ｃ類　（現実との乖離・対立には関わらない）当為や命令を表す例	16 例[6]

３・３　Ａ類の用例について

①　我妹子が何とも我を思はねば含める花のほに咲きぬべし［応］

（11・2783）

「含める花のほに咲く」とは、恋心を隠しきれなくなることである。この例では接続助詞バによって推論の根拠が明示されているので、下記のような推論の構造を捉えやすい。

相手から何とも思われないと、募る恋心を隠していられなくなる

あなたが私を何とも思ってくれない

（ゆえに）私は募る恋心を隠していられなくなるはずだ

多くの例ではわざわざ根拠を言語化したりしないが、推論の構造自体は同じであって、

②　白露を取らば消ぬべし［可］いざ子ども露に競ひて萩の遊びせむ

（10・2173）

の場合は、経験に基づいて、さらには「珠の如くして詎（なん）ぞ収むべけんや」（唐・孫頠「宿煙含白露」）という漢籍の知識に基づいて、白露は珠のようだが実際は滴であり、滴の性質からして手に取れば消えてしまう、といった推論がなされている。

③　草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべく［倍久］も咲ける萩かも

（8・1532 笠金村）

④　朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく［可］恋ひ渡るかも

（4・599 笠女郎）

といった連用形でも、同様に推論が表される。これらは「萩の咲ける（こと）は、旅行く人も行き触ればにほひぬべく（である）」、「恋ひ渡る（こと）は、命死ぬべく（である）」という倒逆的な主述関係であって、このようなベシと、終止形で述語を構成するベシとの間に意味上の異なりがあるわけではない。なお、触れたら色に染まる、恋い焦がれたら死に至るといった内容は、萬葉集ではしばしば詠まれるものであり、演繹的な推論の根拠となりうるような共有された知識であったことが窺われる。

⑤　夕置きて朝は消ぬる白露の消ぬべき［可］恋も我はするかも

（12・3039）

は連体法であるが、④と同様の推論が連体装定の形をとったという差にすぎず、

⑥　思ひ出づる時はすべなみ佐保山に立つ雨霧の消ぬべく［応］思ほゆ

（12・3036）

のような例とも意味が通う。現代語訳をすると活用形によってやや異なる訳出をしなければならないため、③～⑤のような連用装定・連体装定まで含めてベシの共通性を捉える試みはあまり行われていない。しかし推論という枠組みで見れば、述定であれ装定であれ、共通する意味構造を析出することができる。

⑦　白たへの袖別るべき［可］日を近み心にむせひ音のみし泣かゆ

（4・645 紀女郎）

歌の相手や詳細な事情は不明であるが、別れの時が近いという。こうしたベシは予定と称されることもあるが、原理的に予定と推論は明確に区別できるであろうか。例えば、

出来事Ｅが生じることは別れを意味する

ある時間Ｔに出来事Ｅが生じることが決まっている

（ゆえに）ある時間Ｔには別れることになる

のように、意味の構造自体はこれまでの例と同様の演繹であり、推論という作用的な側面に比して、むしろ対象的な側面が焦点化されることで、予定という把握が行われているにすぎないと思われる。こうした例も含め、Ａ類が一貫した構造に基づくことをここでは見た。

３・４　Ｂ類の用例について

⑧　妹がため命残せり刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを［応死物乎］

（11・2764）

激しく思い乱れている現状からすれば、今にも自分は死ぬであろうと推

論される。しかし実際には愛しい人のために生き続けているのであり、観念上の推論内容と現実事態との間に乖離・対立がある。現代語の「……はずなのに」「……はずだったのに」という表現であれば、観念上想定される内容の方が現実よりも望ましいとみなされる場合が多いが、⑧では、これほど恋い苦しむなら死んだ方がましだという思いなのか、あるいは生き続けることを自らの意に適うものと捉えているのかは、判断しがたい。

我妹子に恋ひつつあらずは刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを

（11・2765）

のような類歌を踏まえれば、いっそ死んだ方がましという心理であるとも考えられるが、

我が背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな

（15・3774 狭野弟上娘子）

のような例を見ると、何とか生きていたいという思いであることも想定しうる。⑧はそもそも、生死いずれかを望ましいものとみなす評価的な判断とは無縁である可能性もある。このような例も存在するのだが、次例の場合は事情が異なってくる。

⑨　三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや［可苦佐布倍思哉］　（1・18 額田王）

「べしや」という反語の形式には、二つの判断が表裏的に存すると考えられる。第一には、雲に心があるならば三輪山を隠すはずがないという、以下のような推論がある。

心のある者は三輪山を隠さない

雲には心がある（仮定）

（ゆえに）雲は三輪山を隠さないはずだ

そして第二には、現状のように雲が三輪山を隠すことは、推論に基づく理念的なあり方に反しており、受け入れ難いという評価がある（その受け入れ難さは「心あらなも」という誂から反転的に読み取られる）。そのような評価は、理念的なあり方を規準として、それに照らせば山を隠すなど

望ましくないとみなすものであり、規範に基づく適不適を問題にする点では当為判断への近さを有する。ただし、あくまでも⑨は個別的な場面での不満にとどまるものであり、次のC類に見られる「ますらをは名をし立つべし」（19・4165）のような一般性の高い主語をとった普遍的な内容には至らず、いわば一般化以前にとどまる[7]。逆にいえば⑨は、仮に一般化がなされれば普遍的な当為の言明となりうる質を有するのであり、要するにB類の例には、原理的な意味で、推論から当為への媒介としての性格が見出されるものがある[8]。次例は同じ反語の形式である。

⑩　玉かぎる昨日の夕見しものを今日の朝に恋ふべきものか［可恋物］
（11・2391 人麻呂歌集）

理屈の上では、昨夕相手に逢ったばかりであるから、今朝早くも恋しい思いをすることはあり得ないと推論されるが、実際は既に恋しくなってしまっている。理念上の想定に反する現実の自分への戸惑いには、僅か一晩空いただけで恋しい思いをすべきではないという当為判断との近接が窺われる。これら⑨・⑩の類例には、例えば次のようなものがある。

⑪　出でて去なむ時しはあらむをことさらに妻恋しつつ立ちて去ぬべしや［立而可去哉］（4・585 坂上郎女）

⑫　海つ路の和ぎなむ時も渡らなむかく立つ波に船出すべしや［船出可為八］（9・1781 虫麻呂）

推論と当為については、現代語研究に示唆的な知見がある。中畠孝幸（1998：16）では、ハズダとベキダ（ともに現代語）を比較して次のように述べられている。

> ハズダは、「そうなるのが当然」という道理意識に裏打ちされた必然性を表す表現であり、ベキダは、「そうするのが当然」という規範意識に裏打ちされた妥当性を表す表現である

「当然Xになる（道理）」という場合の「当然」と、「当然Xであるべきだ（規範）」という場合の「当然」は異なるのである。前者の場合は自ずとXが生じるが、後者では逆に、自ずと生じるはずのXが生じない時にこそ、X

が生じるべきだという規範が意識されると考えられる。B類のベシの例は、道理と規範が二度の否定を媒介として連絡をもつことを示唆する。すなわち、当然こうあるはずだという道理を現実が否定し、そのような逸脱的な現実のありようを主体が再否定することで、当然こうあるべきだという規範が生成される。ベシが道理も規範も表す背景には、多義化の装置として否定作用が介在しているといえよう[9]。

その否定作用の一つが、言語現象としては、⑨～⑫では反語という形で現れていた。次のような場合も、同様の意味の構造が見出される。

⑬　まそ鏡照るべき月を［可照月乎］白たへの雲か隠せる天つ霧かも
（7・1079）

対象物が隠されることを嘆くという点では⑨に類する文脈である。ここでは逆接的な助詞ヲにより、想定されるあり方と現実との背反が表されている。障害物がなければ自ずと月が照り輝くものと期待されるが、実際には雲あるいは霧が障害となっており、現実が理念上のあり方を否定している。助詞ヲは現実への不本意さを含意し、そのように現実を不本意に思うことは、月が照り輝くという理念上のあり方こそ望ましいとする評価と一体的である。

⑭　かくばかり恋ひむものそと知らませば遠くも見べくあらましものを［可見有物］　（11・2372 人麻呂歌集）

同様に逆接が続く例である（結句の「有物」には「ありけるものを」という訓もある）。理屈の上では、後に恋の想いに苦しむことを予め知っていれば、相手を遠くから見るだけにとどめたはずである。しかし現実には、苦しみを予見などせず近い関係になってしまい、激しく恋い焦がれ、苦しむことになってしまった。現実は観念的なあり方に反するものであり、そのような現実を望ましくないものとして否認しようとするところに、遠くから見るだけにすればよかった、すべきであったという評価的な判断が成立しているものと解される。

⑬の「照るべき」は月のあり方について述べられたものであったが、⑭

は（相手を遠くから見るという）主体自身の行為を問題にしている。このように、人間の行為の望不望に関する内容に近づくほど、当為の意味への近接が窺われる。

⑮　隠り沼の下に恋ふれば飽き足らず人に語りつ忌むべきものを［可忌物乎］　（11・2719）

は、恋の相手を漏らすという人間の行為が問題となっており、かつ「忌む」という動詞が語義からして否応なく是非の判断に関わることから、一般に恋の相手は決して漏らすべきものではない[10]という当為への傾向が強いように見受けられる。

以上のように、観念上想定されるあり方と齟齬をきたすような現実を否認する例は、当為への媒介として位置づけられ、次のC類と連続的であると考えられる。

３・５　C類の用例について

⑯　……ますらをや空しくあるべき［可］……後の世の語り継ぐべく名を立つべし［倍志］も　（19・4164 家持）

⑰　ますらをは名をし立つべし［倍之］後の代に聞き継ぐ人も語り継ぐがね　（19・4165 家持）

⑯・⑰は「勇士の名を振はむことを慕（ねが）ふ歌」と題された長歌とその反歌である（何の功名も立てられていない自己を嘆くような歌ではない。その意味でB類とは異なる）。ともに「ますらを」が主語に立ち、男とは一般にこうあるべきだという当為判断が表されている。

⑱　ひぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野辺を行きつつ見べし［倍之］　（17・3951 秦八千島）

ひぐらしの鳴く季節には、女郎花の咲いた野辺に出掛けるべきであるという、一般的な教訓のように読める。しかし、⑱は家持邸での宴席で詠まれた歌であり、人々への呼び掛けや挨拶であると捉えれば、当為の言明というよりは命令の意味が読み取られる。このように、当為が相手への働き

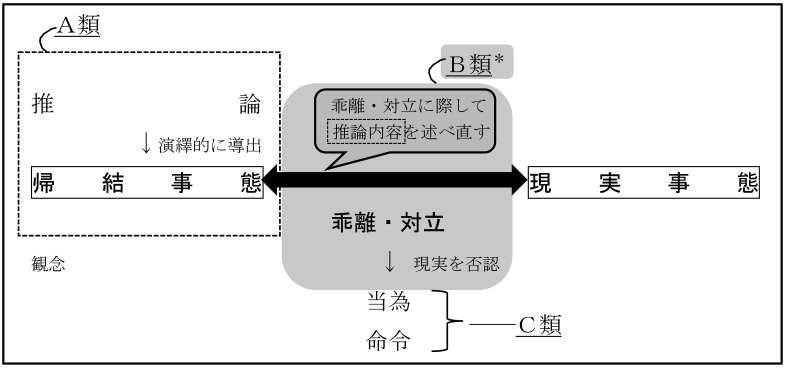
かけとして述べられることで命令となるのであって、両者は截然と区別できる二種ではない。

⑲　我がやどの萩咲きにけり散らぬ間にはや来て見べし［可］奈良の里人　（10・2287）

は、⑱と同じ「見べし」であるが、「奈良の里人」という呼び掛けの表現が入っていることで、命令の意味が明白に前景化している例として位置づけることができる。

３・６　ベシの多義性の原理と基本的意味

以上述べてきたベシのＡ～Ｃ類を、ハズダの意味の枠組み（前掲**【図２】**）との対応がわかるように模式的に図示すると、**【図３】**のようになる。



（＊Ｂ類の網掛けが「当為」のすぐ上にまで掛かっているのは、Ｂ類に当為へと連続的な用例が含まれることを示す。）

【図３】

ハズダの意味分布とパラレルな形で、推論を起点にしてベシの用例を整理することで、ベシの多義性の原理を整合的に説明できることが示された。ここで改めて、ベシに一貫する基本的意味を必然性・不可能性（両者は表裏的な同義概念であるので、必然（性）とのみ略記することがある）と考えることが妥当であるかを検討しておきたい。Ａ類は演繹的な推論を表す

ことから、ベシによって示される帰結事態には必然性が伴う。B類の場合も、想定とは異なる現実に接して、推論によって演繹的必然的に導かれるはずの帰結を述べ直すのであるから、必然性という規定で包摂できる。ただし、付言すべき点がある。推論の帰結と現実との乖離・対立が問題とされる場合、そこでは可能性どうしの比較が行われている。観念上想定される可能性と、実際に現実化した可能性とが相反しており、両者を比較しているのである。この場合に限って、ベシはマシに類する意味構造を担うことになる。

我妹子に恋ひつつあらずは[不有者]刈り薦の思ひ乱れて死ぬべき[可]ものを　（11・2765 再掲）

という「ズハ……ベシ」の例があるが、反実仮想を担う特殊語法ズハは通常マシと共起し、

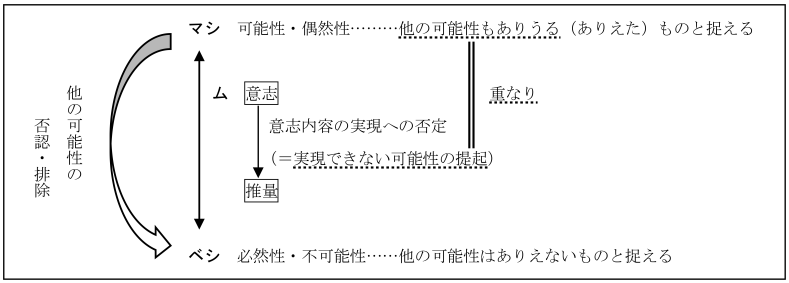
かくばかり恋ひつつあらずは［不有者］高山の岩根し枕きて死なまし［麻死］ものを　（2・86 磐姫皇后）

といった表現をなす。ここに、ベシとマシの接点を見て取ることができる。また、

かくばかり恋ひむとかねて知らませ［末世］ば妹をば見ずそあるべく［倍久］ありける　（15・3739 中臣宅守）

というベシとマシの共起例が存在することも、両形式の類縁性を裏付ける。

ところが、そもそも演繹的な推論を起点とするベシは、マシとは異なり、結局現実の側を否認し、推論によって必然的に得られた帰結こそがふさわしいとする当為・命令（C類）への展開をもつ。つまり、比較されていた可能性のうち一方を排除し、他方でしかあり得ないという意味を担う（一方の可能性を否認するところに、必然性と表裏する不可能性という性格が明瞭に現れる）。以上より、A～C類のベシに一貫する基本的意味を必然性・不可能性と見ることの妥当性が諾われると同時に、第1節で示した**【図1】**はその大枠を維持したまま、マシとベシの関係にかかわる記述を追加して**【図4】**のように書き改めることができる。



【図４】

以上の内容を踏まえて、一つの疑問を解いておきたい。必然であるという判断は、「瓜食めば子ども思ほゆ［意母保由］栗食めばまして偲はゆ［斯農波由］」（5・802）のように終止形終止でも表されうるように思える。このような例とベシによる述語構成とでは、意味の構造がどう違うのかという疑問である。「Ｓは」に対して「Ｐだ」と述語をつけ判断を行う場合に、原理的には「Ｑだ」「Ｒだ」……など複数の可能性が、「Ｐだ」に対して範列的な関係をなす群として想定される。森重敏（1965：87）ではこれに関して次のように述べられる。

> 確言―肯定は、そのような群のなかの一項としての述語を即自的に採った場合であり、疑問は、かりに一項を採ろうとし、ないしは採ってみた場合であり、反語は、一項への疑問―否定が再否定されて、すなわちもとのその一項を採ることに決定した場合である。

終止形による述語構成は上記のうち「確言―肯定」に対応し、ベシによる述語構成は、想定されうる他の可能性を打ち消すという構造からして、「反語」に類比的であると考えられる。すなわち、ベシによる判断には他の可能性への否定が潜在的に含まれる――したがって弁証法的な意味で高次の表現である――と考えられるのであり、稿者はそのことを、特に必然性と並ぶ不可能性という規定によって言表したいのである。

おわりに

本稿では、現代語ハズダの意味を説明する枠組みを援用して、ベシの多義的なあり方を説明することを試みた。その結果、演繹的な推論を起点としつつ、推論から導かれる帰結を否定するような現実に対して、それを再否定することによって当為・命令へと展開するという形で、ベシの多義性の原理を説明できることが示された。そして、ベシの多義的な振る舞いの全体に一貫する基本的意味を必然性・不可能性と規定することの有効性を述べた。

山口堯二（2002：128）は近世前期のハズダについて、「当然の道理に基づく推定の働きを媒介にして、人々に実践を義務づける当為としての判断を担う傾向も生じていた」と指摘した。ハズダに一時期だけ生じた当為の意味は、前述のようにベシとの競合で定着をみなかった。だが、一時期であれハズダに当為の意味が存したことは、ハズダがまさにベシと同じ意味領域への展開を指向したことを示している。両形式がそのように類同的であるならば、山口氏の上記の記述を、ベシの多義性の原理の説明として読み替えることも考えられてよい。道理に基づく推論から連続的に当為への拡がりを捉えている点は、本稿と見解を同じくするものである。このとき、山口氏の言う「推定の働き」がいかにして当為への「媒介」となり得たのか、本稿はその問いに解答を与える試みであった。

《注》

（1）一般に不可能性は可能性の否定として定義され、偶然性は必然性の否定として定義されるため、マシ・ベシの意味規定ではそれぞれ可能性・必然性を先に記し、それらの否定である偶然性·不可能性を後に記している。九鬼周造『偶然性の問題』（岩波書店、1935 年）を参照。

（2）「現実事態」とは、観念（理念·理屈）の上での推論に対する、実際の状況といった意味で用いる。文学作品等で描かれた虚構世界に対する現実世界のことではない。

（3）朴天弘（2021）はハズダの使用条件として、話し手の知識や期待·予想との「ズレ」を指摘している。朴氏の考察の筋道は本稿とは異なるが、「ズレ」への着目は本稿と同じである。

（4）当為と命令の関係については仁田義雄（1991：255 ～）を参照。

（5）反語と否定・逆接以外の例は、マセバ……ベシが 1 例（15・3739）と、意味上

反実仮想と解されるバ……ベシが１例（13・3259）である。なお、ナクニは逆接でない場合があり、例えば「百船の過ぎて行くべき浜ならなくに」（6・1065）は、敏馬の浦を讃美する歌であって、素通りしてしまう現実を嘆くものではない。このような例はＢ類には含めず、どのような船も浜を素通りするはず（がない）という推論に関わると見てＡ類としている。連体法でもＡ類と認定しうることについては３・３を参照。

（６）Ｃ類の用例数が少ないのは、和歌という文体的な事情によるものであろう。

（７）「ますらをは名をし立つべし」（19･4165）は、「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」の短歌の一節である（３・５で詳述）。「名を挙げるはずであったのにできていない」といった観念と現実の乖離はないので、Ｃ類となる。これが憶良の「沈痾の時の歌」に追和したものであることに注意したい。憶良の歌は事実上の辞世歌であり、病の中で自己の生涯を嘆くように「士やも空しくあるべき」（6・978）と詠んでいる。これは、観念上の士の像と現実の自己との乖離を問題としており、Ｂ類の例である。憶良の感懐が、家持の歌では一般性を帯びた当為判断に変じている。ここには、観念と現実との乖離・対立に際し、現実を否認するところに当為が析出されるという過程が、図らずも鮮やかに示されている。

（８）通時的な変化を論じるわけではないので、逆から（当為から推論への順序で）描いてもよいのだが、ハズダの意味の枠組みをベシに試験的に適用することが本稿の主旨であるから、ハズダと同様に推論を起点として、当為へという方向で論述している。結果的に見ても、そのような方向で描くことで無理のない説明をなし得ていると思われる。

（９）森重敏（1959：226 ～ 227）では、主体の意志が満足されない場合に種々の意味分化が生じ得ることが述べられている。現実が意志を裏切るという否定作用が、多様な意味のありかたを生じさせるという点は、本稿がここで述べている内容に通じるところがある。

（10）「隠り沼の下ゆ恋ふればすべをなみ妹が名告りつゆゆしきものを」（11・2441 人麻呂歌集）という類歌の存在は、そうした規範意識があり得たことを示唆する。

《引用文献》

木下りか（2013）『認識的モダリティと推論』ひつじ書房

高橋太郎（1975）「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版

中畠孝幸（1998）「当然を表すモダリティ形式について―ハズダとベキダ―」『甲南大学紀要　文学編』111

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

朴　天弘（2021）『現代日本語の「ハズダ」の研究』ひつじ書房

古川大悟（2019）「助動詞マシの意味」『国語国文』88・1

古川大悟（2023a）「助動詞ムの意味―意志から推量へ」『国語国文』92・2

古川大悟（2023b）「「応久」の解釈―助動詞ベシの意味をめぐって―」『萬葉』235

森重　敏（1959）『日本文法通論』風間書房

森重　敏（1965）『日本文法―主語と述語』武蔵野書院

山口堯二（2002）「「はずだ」の成立」『国語と国文学』79・11

付記

1　本稿の思索の一部は、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士学位論文に基づくが、新たに現代語との対照を導入するなど、理路を大幅に改めた。

2　本稿は JSPS 科研費 22J00132 の助成を受けた成果を含む。

（ふるかわ・だいご／日本学術振興会特別研究員・本学非常勤講師）